HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	秘宝館研究と北海道
Author(s)	妙木, 忍
Citation	CATS 叢書, 11, 373-378
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66653
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_49.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

秘宝館研究と北海道

妙木 忍
東北大学大学院国際文化研究科准教授

1．秘宝館研究を志す

私がまだ，東京大学大学院人文社会系研究科の大学院生だったころのことである。旅の文化研究所第 12 回公募研究プロジェクトに「温泉観光地と秘宝館文化―秘宝館文化の歴史と現状」が採択された。2005 年 4 月 1 日から 2006 年 3 月 31 日までの研究期間は，北海道から九州までフィールドワークをしながら訪ね歩いた。岩手県遠野市の山崎の金勢様（金精様）に記念スタンプがあったことや，愛媛県宇和島市の多賀神社性文化財資料館（凸凹神堂）のコレクションに圧倒されたことや，三重県伊勢市近郊の元祖国際秘宝館伊勢館に医学模型や性的な展示があったことが 20 代前半より気になっていた私は，これら「性の観光化」とも呼べる現象の中でもとくに秘宝館を，社会学の観点から研究しようと思い，研究助成に応募したのだ。応募書類の中には，この研究課題に関して指導教員が作成した推薦書が必要で，上野千鶴子先生に相談したら，快諾してくださった。学生が解きたい問いは，どんな問いでも尊重してくれる先生だった。公募研究に応募するにあたって，フランスを訪問し，パリの性愛博物館と日本の秘宝館の違いを感じ，ますます日本の秘宝館の特質に関心を寄せるようになった。

大学院のゼミで，仮説検証型の研究と仮説生成型の研究があると習った。私は，博士論文研究として進めていた「ライフコースの多様化が生み出す女性間の対立と葛藤に関する研究」では仮説を立て，それを検証するかたちを採った。一方の秘宝館研究は，仮説も立てられないほど謎が多く，研究をしていく過程で仮説が生まれる生成型のかたちを採った。一年間の個人研究では，2005 年当時日本に残っていた 7 館の調査に加え，跡地調査もおこなった。

解くべき問いはまだあり，謎は深まるばかりで，まだまだ研究が必要だと思っていたときに，北海道大学観光学高等研究センターの学術研究員を務めさせていただくことになった。2006 年 5 月 1 日から 2007 年 3 月 31 日までを札幌で暮らした。北海道秘宝館の調査でたびたび札幌を訪れていた私は，札幌という土地は研究にとって重要な場所であり，また，たくさんの方にすでにお世話になっており，安心して，迷いもなく北海道に暮らしたのである。その年はまさに，センターが発足した初年であり，センター長の石森秀三先生と事務の方と私で三人だった。その 11 カ月間はかけがえのない時間となった。石森先生や翌年度から始まろうとしていた大学院に関係する先生方との交流の時間は貴重で，有難いものだった。

2. 「おんなの広場」「おんなの遊園地」—北海道秘宝館

研究を進めるなかで，日本で初めて等身大人形を用いた秘宝館である元祖国際秘宝館伊勢館（1972 年開館）には医学模型があったことと，医学模型と性的な展示が同じ業者によって納入されていたことが経理台帳記録からわかった。また，伊勢よりも後に，温泉観光地に発達した秘宝館（別府秘宝館，北海道秘宝館，熱海秘宝館，鬼怒川秘宝殿，嬉野武雄観光秘宝館）には医学模型がないこと，しかし等身大人形を用いた展示様式は継承されていること，展示初期段階（入り口）に道祖神や金精様が置かれていること，などがわかってきた。

そこで私は，秘宝館の起源には医学展示があるのではないかという仮説を立て，その後，医学的要素が除去されていった過程を解明したいと考えた。日本における，身体模造の造形表現の歴史のなかで，秘宝館はどのように位置付けられるのかという点についても関心を持った。

私がとくに注目したのは，「東宝」出身者が率いる「東京創研」が携わった秘宝館だった。彼らが作った秘宝館には，ユーモア，パロディ，地域性，笑いの要素がちりばめられていた。ハンドルを回すと下から風が吹いてスカートがめくれるなどの訪問者参加型の展示は，大人の遊園地（遊艶地）とも呼べる要素を備え，訪問者同士のコミュニケーションを生み出した。

この会社は，私の調査開始時に残っていた秘宝館のなかでは，別府と北海道の秘宝館の改修と，嬉野と熱海の秘宝館の施工をおこなっていた。これらの秘宝館が 1976 年から 1983 年までに開館していた事実は，ジェンダー研究の観点からさらに私の興味を引き出した。というのも，戦後下がり続けた女性の労働力率が上昇傾向に転じたのが 1975 年だったことや，有配偶女性の労働力人口比率が過半数の 51.3%を記録したのが 1983 年だったという統計的データを思い出したからである。

彼らが手がけた秘宝館は女性客を意識していたという。田中聡さんと（「東京創研」代表を務めた）川島和人さんのインタビュー記録が『ニッポン秘境館の謎』（晶文社，1999 年）に残っている。私もまた，川島さんと一緒に仕事をしていた方々にインタビューをして，同様の証言を得ていた。秘宝館のパンフレットにまで，それを明記したのが北海道秘宝館だった。「おんなの広場 OPEN!!」「世界で初めての“おんなの遊園地”誕生!!」と書かれたパンフレットを北大で広げて見せたとき，ある女子学生がそれに見入った。その学生は，パンフレットにある「北海道秘宝館周辺の観光ガイド」と書かれた絵を指さして，「先生，この地図で北海道秘宝館の前に立っている人も，女の人ですよ」と言った。私もそこまでは気づいていなかったので，小さな絵を見ながら二人で驚いた。目を閉じ，口元に笑みを浮かべた，ピンクのタイトスカートの女性の全身像が横から描かれている。北海道秘宝館の入り口にあった観音様に向かって，手を合わせているようにも見える。秘宝館と女性の旅，この結びつきは意外だろうか？

私は秘宝館を生み出した時代，秘宝館を作った人たちの人生（ライフヒストリー），秘宝館と女性の旅の関係についても，もっと知りたいと考えるようになった。観光学高等研究センターに在籍したときの調査研究としては定山渓温泉を分析対象とし，団体旅行の盛衰にともなって変化を遂げた文化として，料理の文化，芸者さんの文化，娯楽施設（秘宝館）について調査をした。

北海道の調査を継続している最中，2007 年 1 月に，センターの事務の方が，私の研究に関係があるのではないかと言って，一枚のチラシを渡してくれた。それは，北海道大学総合博物館でムラージュ（蝋製皮膚病模型）が一般公開されるにあたっての，土曜市民セミナーのチラシだった。私はそのおかげで展示についての講演を聞くことができ，伊勢にある医学模型がムラージュにそっくりであることに気がつき，すぐに伊勢に飛んだ。伊勢の秘宝館の松野憲二さんに，この展示が持つ意味について力説をした。2007 年 3 月 31 日に伊勢の秘宝館が閉館したとき，医学展示のうち 23 点を譲り受け，国内の研究機関に寄託した（2007 年 6 月 21 日）。寄託先のことで，北海道大学総合博物館の湯浅万紀子先生が相談にのってくださり，寄託をお願いする際の文書を添削してくださった。もしあのとき，ムラージュのチラシに出会わなかったら，永年保存をするという発想には至らなかっただろうし，実現もできなかったことだろう。私が観光学高等研究センターに在職した 11 カ月の間に，伊勢の秘宝館が閉館し，北大がムラージュを公開し始めたという偶然も，不思議でしかたなかった。

3. 北海道に戻り，秘宝館から日本社会を見る

私は 2007 年 4 月に東京に戻り，博士論文の執筆に取り組んだ。「ライフコースの多様化が生み出す女性間の対立と葛藤―戦後「主婦論争」を通して―」という博士学位請求論文は，2009 年 6 月 18 日に学位が授与され，その秋には，『女性同士の争いはなぜ起こるのか 主婦論争の誕生と終焉』（青土社，2009 年）が刊行された。その後，東京で大学の非常勤講師をしたり，高校の英語の非常勤講師をしたり，ホテルの売店でアルバイトをしていたが，就職がないことは覚悟の上で研究を始め，やりたい研究を続けてきた私は，後悔もなかった。時間や調査費がなく，調査を中断した時期も長い。けれども，秘宝館への想いを持ち続け，問いへの関心をあたため続けることだけは忘れなかった。

土日だけでも研究をしたいと思い，北海道大学創成研究機構の特定専門職員として再び札幌に移り住んだのは 2012 年 7 月のことだった。その後，特任助教となり URA（リサーチ・アドミニストレーター）の仕事に携わった。

その後，北海道大学大学院文学研究科に 2013 年 6 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日までの任期で，助教として勤務した。この 10 カ月は，秘宝館研究に専念した。秘宝館という窓から見える景色とはどのようなものか。秘宝館を通して，日本社会や日本文化を見てみることにした。2014 年 3 月 21 日，2006 年 6 月の学会発表のときに声をかけてくださった出

版社のもとで，本を刊行した。『秘宝館という文化装置』（青弓社，2014 年）である。8 年間も待ってくださった。文学研究科の図書出版助成もいただくことができた。

文学研究科に在職したときに，北海道大学 CoSTEP の川本思心先生（現在は理学研究院）と出会った。川本先生は，この研究に関心を寄せてくださり，サイエンスカフェで秘宝館について考える機会も設けてくださった。

文学研究科の次は，2014 年 4 月 1 日から，北大国際本部留学生センター（現・国際教育研究センター）で 2 年間勤務した。そんなある日，北海道新聞に書評が載った（2014 年 5 月 18 日）。書評や関連記事の記録は，私が文学研究科を離れた後も，研究推進室の森岡和子さんに学内便や郵送で記事のコピーを送り続け，文学研究科・文学部サイトにあるウェブ版「書香の森」に記録を残してくださっている。

4. 失われゆくものを記録するということ

研究を一通り終えて，新たなお題をいただいた。それは，北海道大学総合博物館の山下俊介先生からのものだった。山下先生は，2016 年 12 月 2 日に北海道大学総合博物館の第 5 回博物館研究会「娯楽観光施設の研究と記録化」を企画してくださった。そのなかで私は，「秘宝館の記憶・記録・分析―研究者が失われゆく文化遺産に向き合うとき―」という題で講演をさせていただき，対談の機会もいただいた。

私はこの研究会に向けて，それまであまり考えてこなかった，「記録化」という論点に向き合うことになった。失われゆくものを分析することの困難，資料の保存，記録のあり方について，私はこの 10 年間を振り返ってみた。思い返せば私は，研究を進めると同時に，どんどん失われてゆく秘宝館とその現実に直面するたびに，何かできないかと考えて，行動してきたように思う。というよりも，研究を進める過程で，その重要性にいつの間にか気づいていったように思う。失われていく現実も分析の対象としながらも，保存について考えようとしたのは，その切実さに迫られたからだったのかもしれない。それゆえに私は，医学模型の保存先を探したり，閉館する秘宝館の展示物や文書を，一部譲り受けたりしたのだろう。

秘宝館がもはや熱海にしかなくなった今となっては，何気なく集めたパンフレット，調査で書き込んだノート，フィルムで写した写真，譲り受けた展示物や文書，文字による分析でさえも，過去の状況を示す貴重な資料となりうる。しかし私は，秘宝館の体系的な記録化については十分考察できていなかったと思う。それは，これからの長い検討課題となりそうだ。

写真や映像の専門家，秘宝館に関心を寄せる人々も秘宝館の記録を残そうと試み，実際に残してきた。嬉野武雄観光秘宝館が閉館した 2014 年 3 月前後は，新聞や雑誌が秘宝館を取り上げた。失われようとしたときに初めて光が当てられることを複雑な思いで見守った。秘宝館の展示物を大切にしている方にも出会った。福岡市美術館の学芸員の山口洋三さん

は，嬉野武雄観光秘宝館に展示されていた嬉野弁財天の蝋人形を保存している。山口さんが企画した「彫刻／人形」展を 2015 年 8 月に福岡まで見に行ったときに，その弁財天さんが中央に展示されていたことが印象的だった。香川県の直島に行けば，大竹伸朗さんがプロデュースした直島銭湯「I♡湯」があるが，その中の，男湯と女湯のしきりに北海道秘宝館入り口にあった象が飾られている。いつか将来，秘宝館が再検討される時代が来た時に，日本各地に保存されている資料や展示物が生き生きとよみがえるような気がしてならない。そのときには私の研究してきた記録や私が集めた資料も，日本文化の一側面を表すものとして，役に立つかもしれない。

秘宝館における女性の身体表象を批判することはたやすいかもしれないが，私はそれをしなかった。秘宝館のありのままの姿に向き合い，それが生まれた時代とそれを作った人たちの人生に関心を寄せたからである。秘宝館を低位に位置付けようとする方もいるだろう。けれどもそれは，なぜ秘宝館を低位に位置付けようとするのかという新たな問いを私にもたらしてくれた。私は秘宝館をめぐる問いを解くのが楽しかったので，誰に何を言われても平気だった。

秘宝館研究は，イタリアやフランスの医学展示の研究に私を導いた。最近は，女性の身体表象と医学博物館の調査を始めている。秘宝館とヨーロッパの医学模型のつながりについては，北海道社会学会の学会誌『現代社会学研究』Vol.29（2016 年 6 月）において，坂無淳さんが書評で問うてくださり，私もリプライを書いた。というのも，『秘宝館という文化装置』にはその研究の兆しが読み取れるものの，秘宝館との関係が十分に論じられていないからである。医学と女性に関するテーマは，2006 年 1 月から抱き続けたテーマであり，細く長く続けてきたテーマである。この研究は，2014 年 4 月から再開したところだ。

秘宝館の本を書いた後も，新たな論点を再発見する日々が続いている。北海道大学大学院文学研究科の武田雅哉先生と出会い，武田先生とその共同研究者の皆さんと，乳房の表象をめぐる討論に参加させていただいている。また，文学研究科の近藤智彦先生とともに，伊勢の秘宝館にあったギリシャ神話コーナーの展示物を通してギリシャ神話がどのように受容されたのかについての考察を始めることができたことは，私にとって大きな転機になっている。観光学高等研究センターの山村高淑先生には長くお世話になっており，2014 年の TOYAKO マンガ・アニメフェスタでのイベントや，2014 年度公開講座の連続対談などで秘宝館について考える機会をいただいた。最近では，コンテンツツーリズムの観点から身体の展示を考える機会をいただいている。私がこれまでに分析できなかったような視点を，秘宝館の分析に取り入れてみたり，秘宝館を素材として考えてみたりすると，新たな発見があるかもしれない。その意味において秘宝館は，何度でも分析されうると思う。

このように，私の秘宝館研究は，北海道という土地や北海道大学という研究環境の中であたためられて，育てられてきた。その原点に，観光学高等研究センターがあったことは，言うまでもない。

どんなに小さな問いでも，それを解きたいと思う人がいる限り，その問いは解かれることになる。失われゆくものをとめることはできないが，それを分析することはできる。そこから日本文化の豊かさを発見することや，未来を展望することは，可能であると私は思う。